

ワールド新聞と日清戦争報道

——「旅順虐殺事件の一考察」補遺(二)——

大 谷 正

一 はじめに

本稿の課題は、一九世紀の末から二〇世紀の初頭において合衆国を代表する新聞の一つであった、ワールド新聞の日清戦争に関する報道を検討することである。

筆者は以前に『専修法学論集』に掲載した二つの論文において、日清戦争に際して日本政府は陸奥宗光外相を中心として欧米列強に対する広報外交を試みたこと、それは後の日露戦争時に桂太郎内閣が金子堅太郎と末松謙澄を欧米に派遣して行ったそれと比較すると初歩的なものに過ぎなかったが、条約改正交渉を課題としていた小国日本にはそれは不可欠なものであると陸奥達⁽¹⁾が考えていたこと、を指摘した。現在の広報外交は様々なメディアの発達によって、多様な形をとっているが、この当時の広報手段は当該国の有力者に個別に働きかけるか、せいぜい講演会あるいは新聞・雑誌を通じて訴える程度の素朴なものであった。なかでもこの時代のマスメディアの王者であった新聞は重要視され、これは外務省が広報外交を『(外国)新聞操縦』と称していたことから明らかである。

ところで、従来の日清戦争史研究においても新聞報道は、国内紙・外国紙を問わず、歴史的事実を明らかにするための史料として多用されてきた。しかし、それらの新聞報道を日本の戦争政策・列強の極東政策に影響を与えるもの、また日本政府が自国の戦争政策を有利に進めるために働きかける対象、として考えることは近年まで稀であった。この戦時における広報外交を学問的レベルで初めて問題にし、日露戦争を例として二つの労作を著したのは松村正義氏であった。⁽²⁾ 氏の新たな研究視角の提示と多くの史料を駆使した実証作業は研究史上で画期的なものと言っても過言でない⁽²⁾と筆者は信じる。

だが、氏の仕事に問題点がないわけではないし、残された課題もあるように思われる。例えば、日本政府の広報外交は、日清戦争の時代にはまだ行われておらず、日露戦争に始まる、と松村氏は主張するが、⁽³⁾筆者は前稿においてこの試みが少なくとも日清戦争にまで遡り、さらに外交担当者⁽³⁾の意図としては明治初期まで遡る可能性があるあることを述べた(ただし、いつを始まりとするのかを決定する要素は広報外交の定義による所が多いが、氏はこれを自明のこととして、積極的定義を行っていないようである)。また、広報外交の目的に関しては、氏は黄禍論(「恐黄熱」)防止を主要目的とすると主張するが、これは日露戦争を事例としてとりあげるからで、もし日清戦争時のそれを問題にするならば、むしろ条約改正問題をとりあげるべきであろうし、不平等条約の背後に存在する異なった世界、異なった文明の交流と摩擦の問題にも言及することもできたはずである。さらに、松村氏の叙述方法は、日本側の働きかけが、欧米の政治家・有力者個人、あるいは世論の対日認識に如何なる変化を与えたか(または与えなかったか)を明らかにするという手法をとっているが、広報外交の効果を云々するならば、一步踏み込んで当時の欧米の対日認識そのものの論理構造や成立事情を明らかにしたうえで、それが戦争の過程で如何に変化していったのか、そして政府の政策決定にどのような影響を与えたのかを見ていかねばならない。

以上で指摘した問題点は、「言うは易し、行は難し」であり、筆者自身も今すぐにはできる訳ではなく、本稿も将来上記の課題を果たすための準備作業にとどまらざるを得ない。しかし、標題を「ワールド新聞の日清戦争報道」とせず、「ワールド新聞と日清戦争報道」としたのは、同紙に掲載された日清戦争関連報道を単に史料として利用しようとするだけでなく、同紙が特定の観点から日清戦争報道をおこなった理由、その合衆国の世論・政治への影響、日本側の働き掛け、戦争の進行に伴う同紙論調の変化などを、一種の相互作用として考える立場に立とうとする、筆者の研究姿勢を示したものである。

ところで、論を起こすには、本稿が合衆国の数ある新聞の中からワールド新聞を選んで、その日清戦争報道を問題にしようとする理由を説明しなければならない。その第一の理由は、ワールド新聞の日清戦争報道が有名で（特に旅順虐殺事件に関して）、日清戦争の研究書・論文に必ずと言っていいほど言及されるにもかかわらず、現物に当たって、同紙の戦争の全過程を通じての報道を確認した作業がほとんどないからである。これは日本の図書館で一九世紀末の合衆国の新聞を所蔵している場合、ほとんどがニューヨーク・タイムズのように現在も刊行されている有力紙（多くはマイクロフィルム）に限られ、ワールドのように当時最高の部数を誇り、影響力も大きかった新聞でも、途中廃刊・買収の憂き目にあったものは所蔵していないからである。これは困ったことである。誰でも分かることだが、ワールドやニューヨーク・ジャーナルが無くてはアメリカ帝国主義史・社会史の研究はできないだろうし、サンフランシスコ・イグザミナーが無ければ、カリフォルニアの排日問題は明らかにできないはずであるのに。従って我々は、外務省外交史料館や防衛研修所戦史部図書館所蔵の史料ファイルに添付されている外国新聞記事の切り抜きを見て、その報道の全体像を想像するしか手段がないのである。第二の、そしてさらに重要な理由は、同紙の日清戦争報道が、例えばニューヨーク・タイムズに較べて、報道量で圧倒的に多く、

かつその内容も面白いからである。何故そうなのか、その理由は、第二章で説明する予定である。

以上のような史料上の制約から、現在の日本では日清戦争に関するニューヨーク・タイムズ以外の、合衆国新聞の報道を裏証的に明らかにした著作を期待することは難しい。むしろ明治時代の軍の公刊戦史、民間人による戦史、日清戦史に関する法律・外交史分野の研究書などを見るほうが面白い情報が得られる。⁽⁵⁾合衆国の文献も調べる必要があるが、次の文献を見付けたのみであった。専門家のご教示を仰ぎたい。

① Thomas L. Hardin. *American Press and Public Opinion in the First Sino-Japanese War. Journalism Quarterly*, Vol. 50, No. 1. Spring 1973. pp. 55-59.

② Jeffery M. Dorwart, James Creelman, the *New York World* and the Port Arthur Massacre. *Journalism Quarterly*, Vol. 50, No. 4. Winter 1973. pp. 697-701.

③ —. *The Pigtail War: American Involvement in the Sino-Japanese War of 1894-1895*. Amherst: University of Massachusetts Press, 1975.

ハーデン氏の論文には日清戦争時の合衆国の世論を、新聞と雑誌を使って明らかにしようとした意欲が伺われるが、極く短い研究ノート的なものである。その冒頭には、“Pro-Japanese editorials swept away across nation at outset. Sympathy for underdog turned to admiration of victors and then to apprehension that led to *yellow peril hysteria*.”という要約が掲げられている。この研究が実現すれば大変面白いと考え、彼が当時イリノイ大学で博士論文の用意をしている旨の注記がなされていたので、Frank J. Shulman, *Doctoral Dissertations on Japan and on Korea, 1969-1979: An Annotated Bibliography of Studies in Western Languages*. University of Washington Press, Seattle and London, 1982. で探してみたが、発見できなかった。ダウナー氏は、一九七一年

にマサチューセッツ大学でPHDの学位を得ており、文献の②と③はその成果を発表したものである。②は旅順虐殺事件を煽情的に報道したワールド新聞のやり口を紹介し、それは米西戦争時のYellow Journalismの報道合戦を予告したものである、と結論している。③の特に第六章が本稿と関係がある。

本稿は、これらの合衆国における先行研究を参照しつつ、日清戦争に関するワールド新聞の報道を検討している。

- (1) 「旅順虐殺事件の一考察」『専修法学論集』第四五号、一九八七年三月、「エドワード・ハワード・ハウス註考」同第四八号、一九八八年九月。
- (2) 松村正義『日露戦争と金子堅太郎―広報外交の研究―』新有社、一九八〇年、同『ポーツマスへの道―黄禍論とヨーロッパの末松謙澄―』原書房、一九八七年。
- (3) 松村『ポーツマスへの道』「まえがき」i、ii参照。
- (4) ワールド新聞は、国会図書館、東京大学法学部明治新聞雑誌文庫、東京大学新聞研究所には揃いでは所蔵されていない（一九八八年一〇月現在）。専修大学図書館に一九四・一九九五年の二年分の朝刊と日曜版のマイクロフィルムが所蔵されている。この前後の部分の購入については、交渉中である。合衆国でも廃刊となった新聞の保存は必ずしも良好でないようである。日清戦争期のニューヨーク・トリビュン紙のマイクロフィルムを注文した所、極く少数しか現存しておらず、使い物にならなかった。
- (5) 公刊戦史は、参謀本部編『明治二十七八年日清戦史』と軍令部編『明治二十七八年海戦史』がある。民間のものとしては、博文館編『日清戦争実記』（週刊）、一八九四年―一八九五年。および川崎三郎『日清戦史』全七巻、博文館、一八九六年―一八九七年。古い国際法・外交史の専門書としては、Ariga, *La Guerre Sino-Japonaise au Point de Vue du Droit International*. Paris, 1896. や Takahashi, *Cases on International Law during the Sino-Japanese War*. Cambridge, 1899. および巽来治郎『日清戦役外交史』早稲田大学、一九〇二年。

二 新しい新聞と新しい新聞記者

I ビュリッツァーの新聞

ワールド新聞は、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、合衆国を代表する新聞であった。それは同紙が合衆国で最も売り上げ部数の多い新聞であっただけでなく、時代を画する新聞であつたからだ、と言われる。

これについてワイズバーガー氏の入門的な著書は大要つぎのように説明している。合衆国では一九世紀の後半、新聞製作の技術革新（高性能印刷機・パルプ製紙・ラノタイプ活字）が著しく、一八九〇年代には、一日で、五〇頁ないし八〇頁の写真や挿絵（しかも色印刷の）を入れた新聞を数十万部も、製作し印刷することが可能となり、ほぼ現代と同様な形式の新聞が成立する。これらの技術革新は、読者数と広告の増加、頁数の膨張と定価の切り下げをもたらし、幾つかの新聞王国を作りだした。一八八三年にはジョセフ・ビュリッツァーのワールド新聞が登場した。彼は一九世紀半ばに、ヘラルド新聞（ベネット）やサン新聞（デー）が試みた大衆新聞のやり方を時代にあうように再編成し、「公共意識、広範囲なニュース・カバー、特別記事、十字軍精神、ウィット、センチショナリズムを巧みにミックス」して大きな成功を収めた。この時代のワールドは煽情的な大衆紙であつた。しかし、同時代のイギリスやフランスのように、高級紙と大衆紙の読者層が画然と分かれるのではなく、合衆国ではワシントン・ポストやトリビューンの読者と大衆紙の読者が重なり合い、金融・政治・外交などの硬派のニュースも、低俗な記事と同じく、ふんだんに掲載された。⁽¹⁾（入江訳本一一五～一二四頁）

以上の紹介で、ワールド新聞が大衆新聞でありながら、政治的・社会的にも影響力を持っていたこと、またある点では万朝報や、すこし遅れて発展する大阪朝日新聞や大阪毎日新聞のような、日本型の近代的大新聞と共通

する性格を有することが確認できた。つづいて、合衆国の大衆紙と戦争報道の関連について見ていく。

戦争は、日本でも外国でも、昔から有力な新聞種であったが、近代的戦争報道が登場するのは一九世紀の後半であった。フィリップ・ナイトリーは近年邦訳された著書の中で、クリミア戦争を契機に最初の従軍記者が登場し、この後南北戦争から第一次世界大戦までが、従軍記者の伝える戦争報道の「黄金時代」であった、これは大衆紙の興隆、電信の利用増加、組織的検閲の導入の遅れによるものであった、と指摘している⁽²⁾。合衆国では南北戦争は大量の新聞記者を動員し、これに参加した若者の中から一九世紀末から二〇世紀初頭の新聞界をリードする記者・編集者が生まれた。ところが、これに続く、普仏戦争(一八七〇年)、パリ・コンミュン(一八七一年)、南ブルガリアのキリスト教徒に対するトルコ軍の虐殺(一八七六年)、露土戦争(一八七七―一八七八年)、その他アフリカとアジアでの列強と現地住民の間の戦争に関する報道においては、合衆国の新聞はヨーロッパ諸国の新聞に引き離されていた。この理由は、これらの紛争地域がヨーロッパとその周辺あるいはヨーロッパ列強の勢力範囲に属していたためであろう。しかし、極東で発生した日清戦争、合衆国のお膝元のキューバを舞台とした米西戦争およびフィリピンの戦争には、多くの米国人従軍記者が参加してヨーロッパ諸新聞に遅れを取らなかったし、既に合衆国最大の新聞に成長していたワールド新聞も、これを積極的に報じた。

戦争記事は、自国の外務省や日清両国の合衆国駐在公使館、あるいは極東の各国に在住する契約特派員等から、またロイターなどの通信社からも得ることができるが、生々しい情報は従軍記者に頼らざるを得ない。戦争の開始後早い時期に、従軍記者を日本へ送り込んでいるのは、合衆国ではワールドとヘラルドが群を抜いていた(表1参照)。なお、表で明らかのように、ベネット・ジュニアの経営するヘラルド紙が一番多くの記者を派遣しており、日本政府とも関係を持っていたが、ヘラルド紙が現物もマイクロも日本で見られないことから、その分析は今後の課題とせざるを

表1 日清戦争外国人従軍記者

人 名	新 聞 社	備 考
合衆国 クリールマン ガーザイル ウォルター・スミス スヘンリー・ロシイア ジュー・ダヴィドソン エドワード・ハレット	ウォールド ヘラルド サンフランシスコ・クロニクル ニューヨーク・ヘラルド ニューヨーク・ヘラルド アトランタ・コンスタネーション	許可 '94. 9.12 許可 '94. 9.12 許可 '94.11.26 許可 '95. 1.18 不許可 '95. 1.23 許可 '95. 6.10 台湾従軍
仏 国 ラザリー フェルナン・ガネスコ ラロー	タン フヒガロ及イリュストラーション イリュストラーション	許可 '94.10.16 許可 '94.10.31 許可 '94.12. 1 画報者
英 国 エフ・ウイリヤース ダブリュ・エッチ・スミス ケー・コウエン ドクトル・ポール ジー・ダブリュ・ワード チャヘラス・フリッパ 独乙国 アルブレヒト・ザイルト	フラク・アソド・ワイト及スタンダード ルーター タイムス タイムス ポール・モール・ガゼット グラフィク フランクホルト・ツァイトUNG	許可 '94. 9.12 画報者 許可 '94.10.23 許可 '94.10.23 許可 '95. 1. 5 許可 '95. 1.17 不許可 '95. 3.12 新聞画工 許可 '95. 3.17

(註) 『日清戦役ノ際外国新聞記者概況観察ノ為メ従軍願出一件』(外務省記録明治大正5, 2, 11, 4)による。これ以外にも、外国人従軍記者がいるのは確實であるが、参考に掲げた。

得ない。

一九世紀後半、世界の主要都市は電信網で結ばれるようになり、日本にもその支線が延びていた。大西洋海底電線が一八六六年に完成し、デンマークの大北電信会社は維新直後、長崎上海間、長崎ウラジオストック間、呼子釜山間の海底電線付設権を獲得してこれを完成させたので、日清戦争時には日本のニュースはその日のうちに欧米へ伝えられた。ただし、北京ソウル間の電信はできあがっていたが、ソウル釜山間の陸上電信は未完成であり、日本と作戦地域である朝鮮・満州との通信は不定期の船便に依存せざるをえなかった。このため日本に戦闘の結果の第一報が入ってくるのは上海電としてであり、日本の戦争指導に支障が生じた。また太平洋海底電線は未完成であったので、この点では合衆国新聞は不利であった。³⁾しかし、長距離の電信には、料金が掛かることと、写真・スケッチが送れないという弱点があり、日清戦争の段階では電信の利用は短い緊急通信記事に限られ、長文の記事と図版はあいかわらず郵便に頼っていた。従って、日本軍に従軍する外国人記者が本国に記事を送る場合、前線から宇品や長崎に送られた記事は、長文の記事はスエズ運河經由南回りの船便で欧州に送られるか、または横浜からバンクーバー・タコマ・サンフランシスコなどの太平洋岸の港に送られ、さらにそこからニューヨーク・欧州に電信・鉄道・船便を使って送られたのであった。当時、太平洋航路が約二週間、大西洋航路が一週間余りかかったから、船便で記事を送ると、日本本土からニューヨークまでおよそ三週間弱、日本からロンドンまで最低一月程度を必要とした。⁴⁾

例えば、ジェームス・クリールマンの旅順虐殺事件を報じた有名な記事は、一月二日に横浜から電送され翌二二日のワールド朝刊の一面を飾ったが、これはわずかに一〇〇語の短いものに過ぎなかった。これに続いて、一月二〇日の一面と二面の全部を使った旅順虐殺事件の詳報は、一月二四日旅順で書かれ、クリールマ

ン本人が日本へ持参し、日本本土から船便でバンクーバーに二月一九日到着し、そこからニューヨークへ電送されたものであった。一方、ロンドン・タイムズに同事件の詳細と社説が掲載されたのは、翌年一八九五年一月九日であったが、この記事は同紙コーウェン記者が二月三日神戸で書いたものであり、日本英国間が船便で一箇月以上の日数を要していたことを示している。⁽⁵⁾このように、電信による記事ではヨーロッパと合衆国の新聞には差はなかったが、長文の記事では合衆国のそれが有利となり、欧州紙が合衆国の新聞の記事を引用することがあった。事実ワールド新聞は自紙の記事をロンドン・タイムズが引用したことを取り上げ、記事が正確であることの証拠として誇ったのであった。⁽⁶⁾

つぎに、日清戦争に従軍記者を派遣していた新聞とそうでない新聞との紙面構成の違いを、ワールドとニューヨーク・タイムズを例にとりて比較してみよう。この時、ワールドは朝刊、夕刊、日曜版の三種類の新聞を發行していた。朝刊は一四頁建で、一面が国内外の重要記事、二・三面が主要な国内ニュース、四面が社説その他、五面が国際ニュース、六面以降が経済・社会・芸能・社交・スポーツ・婦人家庭欄という構成になっており、最後の三々四面欄が広告に充てられていた。同紙には、ほとんどの面に挿絵や漫画が、時には色刷りで、挿入され、見出しの活字は大きめで、書体も変化に富んでいる。また、各記事の境目を空けて、読みやすいように工夫されている。日曜版は六十四頁建が普通で、最初の六々八頁は平日と同じ構成だが、それ以降は芸能・レジャー・スポーツ・漫画などが中心の紙面となっていた。これに対して、ニューヨーク・タイムズは一面から三面までは国内の政治経済記事で埋められ、国際記事がここに掲載されることは稀で五面に固定されている。ワールドが得意とする柔らかな分野の記事は貧弱で、挿絵・漫画はほとんどなく、見出しの活字も地味である。

日本の宣戦布告の報は一八九四年八月二日の朝刊に掲載された。ワールドはこのニュースを一面のトップに掲

た。この見出しをいけた。

THIS IS WAR, JAPAN SAYS. Foreign Powers Told That the Fight with China Has Fairly Began. Apology Offered to England. Troop-Ship Carrying Chinese Troops Sunk Without Knowing She Was a British Vessel. Jealous Spain Buys Three Cruisers. Russia Will Not Let Corea Be Cut Up or Made a Vessel and Will Keep an Eye on European Meddlers.

この記事は五面に続き、五面のほとんどすべてが関連記事で埋められた。ここには日中兩國のニューヨーク駐在領事、徐乃光と橋口直右衛門とワールド記者との会見が紹介され、徐と彼の妻の肖像および筆跡が掲載された(翌日、橋口一家の肖像と筆跡が掲載された)。また“CLICKS FROM HONG KONG”と題された記事には、中国・シンガポール・インド・ベルシャ・ロシア・欧州・大西洋海底電線を経由して、戦争記事が合衆国に電送されてくる様子が、漫画入りで紹介されている。

同日のニューヨーク・タイムズの五面にも二段半たわって、“JAPAN HAS DECLARED WAR. The Formal Proclamation Was Made Yesterday.”との見出しをつけた記事が掲載された。実は、両紙の伝える極東と欧州からの情報量は、ほぼ同じであったが、記事の扱い方、見出しの付けかた、関連記事の補充などによつて、その印象はかなり違ったものになった。この後もニューヨーク・タイムズは平壤の戦い、黄海海戦などの記事についても、ロンドン経由の通信社情報を五面に掲載するにとどまったが、一方のワールドは極東の戦場に特派員を派遣するなど多角的な情報を掲載し、日清戦争の記事はしばしば挿絵入りの派手な見出しで一面を飾り、両紙の差はますます大きくなった。

表2は同紙の戦争報道の頻度の統計をとったものである。そもそも、当時の合衆国新聞に日本関係の記事が掲

表2 ワールド新聞の日清戦争報道頻度

年 月	日清戦争が報道された日数	第一面で報道された日数	備 考
1894. 7	10	5	王宮事件、豊島沖海戦
8	19	8	宣戦布告
9	15	2	平壤の戦闘、黄海海戦
10	24	3	第二軍上陸
11	26	1	金州・旅順占領
12	22	10	旅順虐殺事件報道
1895. 1	15	5	山東半島上陸
2	13	1	威海衛占領
3	18	8	下関会議、李負傷、休戦
4	20	3	講和条約成立、三国干渉
5	22	3	遼東放棄、講和条約批准
小 計	204	49	
	(65.0%)	(15.6%)	
6~9	23	3	台湾の戦闘
	(18.9%)	(2.5%)	
10	10	2	閔妃虐殺事件
	(32.3%)	(6.5%)	

- 註 1) 1894年7月は7月22日以降の10日間のみ。
 2) () 内の%は、94年7月22日~95年5月31日の314日間、95年6月1日~9月30日の122日間および10月の31日間に対する、その期間に日清戦争関連記事が報道された日数の割合を示す。
 3) この表には、社説は含まない、また極く小さな記事はカウントしていない。それを含めると、報道日数はかなり増加するであろう。

載されることは稀であり、しかも一面に掲載される記事などめったになかったのが実状であったが、九四年七月二日から翌年五月末までの三十四日間の内、日清戦争が報道されたのが二〇〇日以上、一面で報道された日でさえ五〇日近くに達したのであった。その報道には幾つかの山があった。開戦から平壤の戦闘・黄海海戦が第一のピークであり、年末から翌年初めにかけての旅順虐殺事件批判と講和問題・三国干渉がそれぞれ第二、第三のピークをなしている。これは合衆国における日本報道としては空前の規模であったと言える。

ワールドがこれほどまで、日清

表3 ワールド新聞の発行部数

1883. 3	24, 595
1892. 2	396, 264
1894. 2	461, 289
1895. 2	565, 996

註) 部数は朝刊と夕刊の合計。
史料は、World, March 2, 1895.

戦争報道に力を注いだ理由は、編集部がそれが部数増加の手段となりうると考えたからであろう。一八九四・九五の同紙を一覧すると、一面に何度も取り上げられた記事としては、ニューヨーク市政改革問題(タマニー・ホール批判、警察汚職)、電車ストライキ問題、トルコのアルメニア人虐殺事件、銀貨自由鑄造問題などがあるが、これらと比較しても日清戦争報道の比重は決して劣るものではなく、かつ長期にわたる点ではそれらを凌駕した。表3はワールドの発行部数を示したものであるが、この数字は平日の朝刊と夕刊を合計したものである。九四年二月と翌年二月を比較すると約一〇万部の増加を示しているが、部数が急増したのは年末から翌年一月で、わずか数日だが一月には最高七五万部に達した日もある。また日曜版は、九四年初めは二八万部であったものが、九五年一月には三五万部に達した。これらの部数増加には、とりわけ、九四年一二月から始まった旅順虐殺事件報道と、九五年一月の軍隊が出動して発砲した電車ストライキ問題が関係していると考えらるべきであろう。

II ジェームス・クリールマン

新しい新聞報道の誕生は、新しいタイプの新聞記者を必要とした。ワールドが日清戦争に従軍させたのは、ジェームス・クリールマン (James Creelman) であった。彼は一八五九年モントリオールに生まれ、一九一五年に特派員として派遣された世界大戦下のベルリンで病死した。彼は活動的なレポーター(通信員、明治時代風に言えば探訪記者)であり、世紀末から二〇世紀初頭の合衆国新聞界に君臨した三人の巨人、ベネット・ジュニア、ピュリッツァー、ハーストの経営する新聞の記者として活躍し(ニューヨーク・ヘ

ワールド通信員Ⅱ一八七八年—一九三年、ワールド戦争通信員Ⅱ一八九四年—一九六年、ニューヨーク・ジャーナル戦争通信員Ⅱ一八九六年—一九〇〇年、ワールド特別通信員兼論説記者Ⅱ一九〇〇年—〇六年)、一九世紀末の合衆国ジャーナリズムが「通信員の黄金時代」であるというイメージを作り出すうえで最も功績のあった一人であった、と評されている。(後掲史料⑥の五六頁—五七頁)

彼は新聞記事以外に、小説の試作も含めて、いくつかの本を書いたが、自伝は残さなかったし、また彼の伝記も書かれていないようである。しかし、彼の書いた代表的な記事に手を加えて自ら編集した次の著書は自伝的要素を持つ。ただし、この本の記述はかなり基本的な事実にも手を加えているので、注意が必要である。

④ James Creelman, *On the Great Highway: The Wanderings and Adventures of a Special Correspondent*. Boston: Lothrop, 1901; London: Kelly, 1901.

このほか、次の人名事典と文献を参照にした。

⑤ *Dictionary of American Biography*, Vol. II, 1932.

⑥ *Dictionary of Literary Biography*, Vol. XX, pp. 56-67.

⑦ "Character Sketch. Mr. James Creelman, War Correspondent," *Review of Reviews*, November 1898, pp. 338—353.

⑧ "Journalism the Poorer for His Loss," *New York Times*, February 16 1915, p. 8.

文献⑤と⑥は有名な人名事典。前者は標準的なものだが、後者はセントラル・シシガン大学の Ronald S. Marmarilli 氏の執筆によるもので、文献目録つき小伝というべきものである。⑦は彼の名声が最高に達した米西戦争の時点で書かれたものである。⑧は、彼のやり方に批判的であった側からの追悼記事で、彼の功罪を客観的

に述べている。

クリールマンはベネット・ジュニアの下で通信員・新聞記者・編集者としてのキャリアを積んできたが、一八九三年彼のもとを去った。その理由の一つが、無署名記事を要求するベネットの方針に不満を感じたからだという。この後、イラストレイテッド・アメリカンの編集者、コスモポリタン誌ロンドン版のマネージャーをしばらく務め、一八九四年からピュリッツァーの経営するワールドに参加した。この時、ベネットは自分の経営するヘラルドの第一面にクリールマンとピュリッツァーの似顔絵を掲載し、それぞれを「偉大な通信員」、「偉大な編集者」と称賛したという。クリールマンは日清戦争取材のため極東に向かったが、本格的な戦争の取材は彼にとつて初めての経験であった。(史料⑥、⑦)

彼がいつニューヨークを発ち、いつ日本に着いたか、滞日中どのような日程で行動したのか、はっきりしない。分かっているのは、彼が九月一二日に日本政府から従軍の許可をもらったこと(同日ニューヨーク・ヘラルドのガール記者とブラック・アンド・ワイトとスタンダード両紙の「画報者」を兼ねたウィリヤースが従軍許可を得ている。彼らは外国人従軍記者の一番乗りであった)、九月二〇日付で東京から“Japan's Fleet Unhurt. The World's correspondent at Tokio cables details of the sea fight.”という黄海海戦にかんする記事を電報で送り、これが翌日のワールド新聞の一面トップを飾ったのが彼の最初の(署名)記事だということである。

あれほど署名記事にこだわったクリールマンのことであるから、彼の記事が署名入りで掲載されているとの仮定のもとに、その一覧表を作ってみたのが表4である。彼の記事で有名なのは、平壤の戦い(九月一五日～一六日)、黄海海戦(九月一七日)、金州と旅順の戦闘(二月六日、二月二日～二四日、一連の旅順虐殺事件批判を含む)、朝鮮国王との会見記(二〇月二〇日)の報道である。このうち、平壤の戦いと黄海海戦は実際に戦闘を見たのではな

- 940921-1, 5 Japan's Fleet Unhurt. The World's correspondent at Tokio cables details of the sea fight. (Tokio, Sept. 20)
- 940924-7 Bound To Fight It Out. Japan will not listen to talk of peace except through conquest of China. (Tokio, Sept. 8)
- 940925-5 China Ready To Quit. But Japan, Tokio reports say, rejecting compromise, insists on war. (Tokio, Sept. 9)
- 940928-5 Li Hung Chang Foiled. Tried to learn on the sly if the Mikado was willing to arbitrate. (Tokio, Sept. 14)
- 941005-1 Fight At Pingyang. How the World's Japanese correspondent saw the rout of Chinese. (Tokio, Sept. 21)
- 941021-1, 2 Battle of the Yalu. The World's war correspondent gives the first full account. (Tokio, Sept. 30)
- 941024-1, 5 Pingyang's Gory Fight. Word-Pictures from the city's walls by the World's correspondent. (On the battle of Pingyang, Tatong River, Sept. 25)
- 941108-5 Chinese Hate to Fight. The World's correspondent at the front thinks they don't mean to. (Tatong River, Corea, Oct. 11. via San Francisco, Nov. 7)
- 941114-5 Speed Won at Yalu. The World war correspondent with the victorious fleet of Japan. Admiral Ito tells of the fight. (Tatong River, Oct. 5)
- 941115-5 Jealous of Japanese. European Naval Commanders in Asia try to dim the glory of Yalu. (Headquarters of the Japanese army on the road to China, Oct. 14)
- 941128-5 Will England Step In? It looks that way to the World's correspondent at the seat of war. (On Board Gen. Hasagawa's Troopship, bound for Port Arthur via San Francisco, Nov. 27)
- America's Opportunity. After the war is over will she get her share of valuable connections that may be granted in Corea? (Chemulpo, Oct. 27)

- Don't Want Moulken. Its capture would simply provoke Russian opposition. (Chemulpo, Oct. 28)
- 941203-1,2
 Corea's King Talks. The World correspondent asked to send an appeal. America's help implored. (Seoul, Oct. 20)
- 941205-5
 Before Port Arthur. The World's correspondent describes Gen. Oyama's Advance. (Field Marshal Oyama's Headquarters Nov. 1, via San Francisco Dec. 4)
- 941212-1
 The Japanese Massacre. (Yokohama, Dec. 11)
- 941215-5
 Chinese Slunk Away. The World's war correspondent tells how the Japanese got to Port Arthur. (Kinchow, Nov. 8, via San Francisco Dec. 14)
- 941216-5
 Victors Feed The Vanquished. Field Marshal Oyama, Instead of behea (sic)the Chinese. Partly directed the work of mercy. (Kinchow, Nov. 10, via San Francisco, Dec. 14)
- 941217-1
 Women Sought Death. The World's war correspondent saw ten bodies in a heap at Kinchow. (Kinchow, Nov. 13, via San Francisco, Dec. 15)
- 941220-1,2
 The World Report. Creelman cabled that practically the whole population was slain in cold blood. 12日記事再録
- 941222-5
 The Massacre At Port Arthur. At least two thousand helpless people butchered by Japanese soldiers. (Port Arthur, Nov. 24, via Vancouver, Dec. 19)
- 941223-5
 Japan Is Puffed Up. Easy victories developed thirst for conquest and territory. (Yokohama, Dec. 4)
- 950107-1,2
 Japan's Blood Is Up. Soldiers rule the country, and the anti-foreign party is rampant. (Yokohama, Dec. 3)
- 950123-5
 Bloodthurdy Japan. (Yokohama, Dec. 21)
- 950211-5
 The Boltimore In Peril? (Yokohama, Dec. 21)
- 951016-7
 The Mikado Heartsick. Not over the Port Arthur atrocities, but over their exposure. (Yokohama, Jan. 8)
- 950211-5
 Peking Lies Helpless. China's capital cut off from all information about the coming Japanese.
- 951016-7
 The Tragedy At Corea. Japan anxious to throw all the responsibility on the Soshi. (Tokio, Oct. 15)

く、いまだに死臭の漂う戦跡を見たり、伊東連合艦隊司令官から解説を受けて、記事を書いたものであり、戦闘場面に居合わせたのは金州・旅順の戦闘だけである。⁽⁷⁾ にもかかわらず、彼は過去形の短いセンテンスの文章で、これらの戦闘の現場、両軍の発する闘の声、戦いの後の死体の散乱する風景を、読者の目の前に再現したのであった(表4の 940921-1, 5とは、一八九四年九月二一日の一面と五面の記事の意味である)。

ところで、表を見ていると、記事の内容ではなく、形式上の問題に限っても、つぎのような疑問が湧いてきた。

第一に、彼が記事を電送してくる時は“Special Cable Despatch to the World.”という文句が頭に付き、また船便による長文記事には“Special Correspondence of the World.”又は“Special War Correspondence of the World.”とある。ところが、日本の東京、横浜、広島、下関などから寄せられる電報や記事に、同様の文句が付いていることがあり、その数は少なくない。これは、彼以外に契約した通信員が一人以上いるのか、あるいは彼も時には無署名で書いていた、と考えなければならない。例のハウス(Edward Howard House)がワールドの通信員となり、一方で陸奥宗光の密命を受けて、日清戦争中活動したことは以前拙稿で指摘した。⁽⁸⁾ とすれば、ワールドに掲載された日清戦争の報道にはハウスの記事が、かなりの程度混じっていると思われる。ただし、ハウスの署名入りの記事は一篇も見つけられなかった。「密命」を受けている以上当然かもしれないが。

第二に、クリールマンの署名記事は一八九四年九月二一日から一八九五年二月二一日まで連続して何度も紙面に掲載されるが、それ以降は長いブランクがあり、九五年一〇月一六日に閔妃事件の記事が一度だけ唐突に掲載されるだけである。この間、彼は一八九四年一月末に旅順より日本内地に帰還し、しばらくは日本に滞在していたことは確実であるが、その後はどうしたのであろうか。

第三は、クリールマンと朝鮮国王の会見記が一〇月二〇日にソウルから送り出されたにもかかわらず、新聞に

掲載されたのが一二月三日で、実に四五日間もかかっていることである。表4を見ると、更に便利の悪い満州や平壤付近から送られてきた記事でも、三〇日余りで掲載されているのに比べると、異常というほかない。これはハウスが陸奥外相の意向を受けて、クリールマンから送られてきたこの記事の転送をサポートしていたのではないか、との筆者の前稿における想像を裏付けるものではないだろうか。

これらの疑問には今すぐに明確に答えられない部分があるので、今後の課題にしたい。

(1) Joseph Pulitzer (1847, 4, 10-1910, 10, 29)。彼は連邦軍の新兵として、ハンガリーから一八六四年にニューヨークにやってきた。除隊後、セントルイスへ行き、そのドイツ人社会で働いているうちに、一八七八年『ポスト・デイスマッチ新聞』を刊行し、編集担当のジョン・フルバート・コックリル、営業担当のジョージ・ターナーという有能なアシスタントの協力を得て、有力紙に育てあげた。一八八三年、ニューヨークに進出し、ワールド新聞を買収して合衆国最大の新聞とした。

彼の経歴は、DAB または *Dictionary of Literary Biography* などの事典を参照にし、邦語文献では、バーナード・ワイズバーガー著、入江通雅訳『アメリカの新聞人』時事新書、一九六四年、少し古いが、原田棟一郎『米国新聞史論』一九三四年を参考にした。また、George Juergens, *Joseph Pulitzer and the New York World*, Princeton University Press, 1967. は一八八三年〜一八八五年の三年間に限って、ビュリッツァーが部数拡大のためにとった手段を分類・分析したもので、面白かった。

(2) 『戦争報道の内幕』芳地昌三訳、時事通信社、一九八七年（♀との題は、*The First Casualty: The War Correspondent as Hero, Propagandist, and Myth Maker from Cremona to Vietnam*, 1975.）二〇頁。

(3) 日清戦争時の電信については、田健治郎伝記編纂会編『田健治郎伝記』一九三三年、七九一八頁および角山栄編『日本領事報告の研究』同文館、一九八六年、五一〜六頁。

(4) 例えば、日露戦争に際して英国へ渡った末松謙澄の場合はつぎのようであった。一九〇四年二月一〇日横浜発 ↓ 二月

二四日バンクーバー着、二月二九日ニューヨーク着（大陸横断鉄道）、三月五日ニューヨーク発、三月一三日リバプール着。前掲『ポーツマスへの道』付属年表参照。

(5) *World*, Dec. 12, 1894. Dec. 20, 1894. *ザ・タイムズ*, Jan. 9, 1895.

(6) *World*, Jan. 8, 1895. Jan. 9, 1895.

(7) この点の曖昧な文献がまみ見られる。例えば、史料⑥にはクリールマンが平壤の戦闘に参加したような書き方がされているが、これは誤りである。彼が平壤の戦闘に物理的に参加できないことは以下の傍証から明らかである。(1)九月二日に従軍許可を得て、九月一五日に平壤に行くのは困難。(2)九月二日に東京から記事を送っている。(3)アレンの年表（邦訳『朝鮮近代外交史年表』）に一〇月にクリールマンがソウルに來た、とある。

(8) 拙稿「旅順虐殺事件の一考察」二六〇頁—二六二頁。

三 ワールド新聞の論調

本章ではワールド新聞の日清戦争報道の論調を、クリールマンの記事を中心に検討し、さらにワールドの紙面構成の特徴、およびそのような特徴が如何なる計算のもとに作られたのかを考えてみたい。

I 新生日本への共感——開戦から平壤の戦い・黄海海戦——

日清戦争が始まった時、合衆国の世論は圧倒的に日本支持であった。例えば史料①のハーディン氏の論文は多くの新聞・雑誌の記事を引用してこのことを証明し、かつ日本支持の心情が発生した理由をピント氏の論文の結論に依拠して、次の三つの考えかたに求めている。⁽¹⁾

第一に、日本の勝利は極東における「文明」の進歩を意味し、中国の勝利は「野蛮」の継続を意味する。第二に、日本が勝利すれば朝鮮の独立は保証され、中国の宗主権要求は終わりを告げる。第三は、アメリカ人のなか

にある“An emotional sympathy for the then apparent underdog”であった。即ち、図体が大きく豊かな中国に、ちっぽけな日本が挑戦することへの同情、いわゆる「判官贔負」であろう。

日本が緒戦の戦闘に勝利すると親日本報道は一層、力を増した。合衆国では英国と違つて、宣戦布告前における英国船籍の高陞号撃沈事件が問題になることもほとんどなかった。ワールド新聞も、そして特派通信員のクリールマンの報道も、これらの合衆国の世論を反映したものであった。

平壤の戦いを伝えた記事は(前述のように彼が戦闘を裏見していないにもかかわらず)彼の代表作として知られている。⁽²⁾その見出しは、最初に“Pingyang's Gory Fight”とあつて、これに続いて日本軍に対して“brave and humane”、また中国軍に対しては“folly and barbarity”という表現を使用する。記事の最初の部分を引用すれば次のようである。

Ten days ago the armies of barbarism and civilization met on this ground. The Chinese fired on the red cross, violated hospitals, beheaded sick soldiers, tortured prisoners to death and used white flag of peace to cover treachery; but to-night I have seen Japanese surgeons tenderly nursing Chinese captives, after having risked their lives to rescue the enemy's wounded, and I have seen Japanese officers giving cigarettes to prisoners.

この引用文の、「文明の軍隊」が日本軍を、「野蛮の軍隊」が中国軍を意味していることは明白である。日本軍の行為は西欧の軍隊のそれに劣るものではない、との賛辞も見られる。この後で彼は日本が朝鮮の解放者であること、組織だった行動をとる日本軍に対して、中国側は兵士個人は勇敢であるが、彼らは懸賞金のために戦い、逃走の際は軍服を脱ぐなどの非組織的・野蛮な行為があつたと述べる。クリールマンは自分は中国軍が敗北した

ことに満足していると記し、記事を次の言葉で結んでいる。

A generation ago America found Japan in savagery and led her up to this height.

このように彼の記事には、先に紹介したPick氏の第一と第二のテーゼが典型的に現れており、さらに結びの言葉には日本の文明化はペリー以来の合衆国の援助によるとの自負と優秀な生徒への満足感が表明されている。平壤から帰ったクリールマンは、大同江の河口に停泊する橋立艦上で、伊東連合艦隊司令官に黄海海戦の詳細をインタビューし、記事にした。中国側も勇敢に戦ったが、日本艦隊は素早い艦隊行動と速射砲の集中で勝利した、これが要点であった。彼はこの記事を著書に収める際、この話は君には価値あるものだろうという伊東の言葉を、自分にはもっと重大なニュースがあると遮って、ポケットから男子誕生を知らせるオハイオの妻からの電報をとりだすと、伊東は大いに喜びシャンペンを取り寄せ乾杯したとの挿話を付け加えている。これとて日本人の“humane”を印象づけるための計算された作爲の可能性も否定できない。⁽³⁾

当時の欧米の日清戦争報道全体に見られることであるが、ワールド新聞の報道には、civilization, civilized nations あるいは civilized world などの語句が価値判断の基準として頻繁に使われる。この「文明」、「文明国」は、即ち西欧文明を意味し、東洋の文明はこの段階では「野蛮」として扱われた。それは一九世紀半ば以降、最後まで西欧文明に対抗できる文明として存在した東洋文明も、ようやく西欧の足元に屈し、西欧列強は「文明」を掲げて侵略を行ったからである。キリスト教、自由貿易、領事裁判、近代法体系、国際法などが「文明」の具体的指標と考えられたのである。一九世紀末の極東の戦争を伝える欧米の新聞報道も、かかる「文明」と「野蛮」の枠組みを自明の前提としており、特に合衆国ではこれが純粹に信じられる傾向があった。この情況の下で、日本政府は自らを「西歐化」し、それによって不平等条約を改正することを基本的政治路線としていたが故に、日

清戦争を徹底的に「文明戦争化」する努力を重ねていた。戦時国際法・人道主義は「手段」として一兵卒に至るまで敵守させるよう指導されていたが、これをクリールマンは日本が「真に」文明化した証拠として認識したのであった。⁽⁴⁾

実際の戦闘を体験せず、戦跡と死体を眺めただけで書いた記事では、既成の日本の「文明化」という観念に捕らわれていたが、幾つかの体験を重ねることでクリールマンの認識は変化していく。その第一は、先に触れた朝鮮国王との会見記事である。彼は国王の侍医であり、在ソウル合衆国公使館の書記でもあったアレン博士の紹介で朝鮮国王と会見し、インタビュに成功したと主張した。彼はまず日中の間に挟まれた朝鮮の歴史を記述し、つづいて時代離れた珍しい王宮の叙述で読者を引き付けた後、不機嫌で神経質な国王、ぼんやりした皇太子、スクリーンの奥から輝く黒い目で彼を見詰めていた閔妃、豪放な大院君という、朝鮮政界の中心人物の風貌・言動をアメリカ人の目で描きだした。この記事において、彼は解放者日本が実際は中国にとって替わる新たな朝鮮の支配者となろうとしていることを発見し、国王の口から「私を守るためにアメリカ兵を王宮に派遣してもらえば、事態は変わるのだが」とのメッセージを得たのであった。⁽⁶⁾

事実とすれば、これは大スcoopであり、前稿で言及したように、陸奥外相、井上馨全権公使、ハウスを巻き込んだ騒動になったのである。また、たとえこれがアレンなどから得た情報を加工した創作部分を含んだ記事であったとしても、筆者クリールマンと新聞の読者にとっては、「戦争目的は朝鮮の独立の保証と内政改革」との日本の主張が虚偽のものであることが印象づけられたのである。

II 文明の皮を着た怪獣——旅順虐殺事件をめぐる——

クリールマンは大山巖指揮下の第二軍とともに遼東半島の花園口に上陸し、金州と旅順をめざした。この第二軍こそ、日本軍のなかで最も「文明化」された軍隊であった。山県有朋の第一軍は、平壤から満州南部と、比較的西洋人の目の届かない内陸部を進んだが、第二軍は列強艦隊が遊弋・監視している海岸部を進むのであるから、軍の「文明化」には過剰ともいう注意が払われた。第二軍法律顧問有賀長雄の著した『日清戦役国際法論』はその記録であるし、兵士の背囊にはジュネーブ条約の解説が入れられていた。⁷⁾

クリールマンはベテラン従軍画家フレデリック・ウィリアムとともに、裸足の軍夫の群、焼かれ略奪された村、飢えた中国人、主を失った犬等を見ながら、荒涼とした初冬の満州の野を小馬に乗って進んだ。一月六日、彼らは金州城の攻略を目撃した。この戦闘は小規模かつ短時間のものではあったが、城門をくぐった彼らの中にはいったものは、通りに生々しく広がった砲撃の被害にあった婦女子や老人の血痕と、脅えて叩頭して征服者を迎える人々であった。⁸⁾ 彼の中で、何かが崩れ、変わった。満州とニューヨークの連絡は、先に述べたように電信設備の欠如によって途切れてしまい、一時はクリールマンの捕虜説、死亡説も出た程である。⁹⁾ したがって、その金州攻撃の記事は旅順攻略の第一報より遅れてしまい、注目されることも少ないが、そこには戦争の実態を体験して、日本の「文明化」という単純な図式への懐疑が見え始めているようである。

次はいよいよ旅順虐殺事件に関連する報道である。ワールド新聞に掲載された事件関連記事は一八九四年二月一二日の第一報以後、翌年の二月はじめまで、夥しい数に達する。それは、①クリールマンが執筆した記事、②東京のハウスが陸奥外相の密命を帯び、表向きはワールド新聞の依頼を受けた形をとって送ったと思われる記事、③ニューヨークのワールド新聞が独自に取材した記事や社説、の三種類に便宜上分けて考察すれば良いように思われるが、ここでは紙幅の関係から①を中心にし、②③は必要に応じて言及する。

クリールマン執筆の虐殺事件関係記事は一二月に五本（一二日の第一報は一七日に再録された）、一月に三本、掲載された（前掲表4参照）。初めの三本は事件そのものを報道した記事、後の五本は事件を生み出した日本人と日本社会の特徴を探ろうとしたものと言える。事件そのものの性格とそれを詳細に報道した一二月二〇日の記事の内容については、拙稿「旅順虐殺事件の一考察」〔専修法學論集〕第四五号所収に譲り、ここでは繰り返さない。虐殺事件もさることながら、クリールマンが憤慨したのは、一月二二日市街で敗残兵の搜索と虐殺が続いている時、そのことを知りながらも、大山大将以下の軍司令部が軍楽隊の演奏をバックにシャンパンで勝利の乾杯をしていたことである。即ち、彼の観点からすればアジア的「野蛮な虐殺事件と、西洋を模倣した祝賀会が、狭い市街で同居していたのであり、このことは日本の「文明化」の皮相さを象徴するものと考えたのである。また、彼は二〇日の記事において結論部分の直前に、二人の日本兵が死体から心臓を切り取った猟奇的事件を記している。つまり、記事の結論は“Cutting the Heart Out”という小見出しを付けた部分の中に書かれているのである。⁽¹⁰⁾別稿で考察したように、欧米人にとっては一九世紀においてさえ、「食人」は「野蛮」のコードであった。とすれば、このことの意味は案外重要である。それはクリールマンおよびワールド新聞の編集者が、この記事において、日本を決定的に「野蛮」の側に位置付けたことを意味するからである。

クリールマンは一月二九日に広島（宇品）に到着、横浜に向かい、ここから続けさまに日本批判の記事を書き、発送した。即ち、勝ち誇った日本は最早外国の忠告も聞かず、当初の公表されていた戦争目的（朝鮮の独立保護と内政改革）を忘れて領土獲得に乗りだした。謂く、日本では軍人が政治を支配し、排外主義団体がはびこっている。旅順虐殺事件の報道に接した在留外国人は日本の野蛮さに懸念を抱いている。在留外国人の安全を確保するため、日米新条約の批准を中止し、治外法権を維持すべきである。謂く、日本の文明化は外見上のものに過

ぎず、その本質は野蠻である。⁽¹²⁾

その極め付きは、一月二三日の“*The Mikado Heartsick: Not over the Port Arthur atrocities, but over their exposure.*”なる記事である。この記事は最初に、つぎのように記す。天皇とその閣僚達は旅順虐殺事件の巻き起こした波紋を消し、合衆国の上院で新条約の批准を促進させるような計略を準備している。しかし、新条約の批准は合衆国の人民とその財産を日本の権力に委ねてしまう危険性を持つ、と。続いて、クリールマンは、日本外務省の役人は事件の真相を隠そうと試み、合衆国の外交担当者もこれに協力して上院に事実を伝えていないこと、天皇は事件を聞いて寝食不能になるほど心配していること、日本の新聞の中から事件に対する批判が全く起こらない、これはトルコ人がアルメニア人虐殺を満足げに眺めているのと同様であること、を指摘する。さらに、天皇が心配したのは事件が条約批准に悪影響を及ぼすことであり、かかる天皇を憲法で万世一系の半神としている日本の政治体制の下に合衆国人民を委ねることがいかに危険であるかを述べ、中国人が阿片吸引で捕まり拷問をうけた事件を実例にあげて日本では拷問が日常茶飯事であることを暴露する。これらの意見は横浜在留外人の条約改正反対論に影響された想像されるが、外国新聞記者の天皇批判としては珍しいものではないか。

クリールマンの記事を受けてワールド新聞は旅順虐殺事件批判のキャンペーンに乗りだした。事件の第一報の掲載された翌日一二月一三日の社説“*Japanese Atrocities*”は、日本の文明化が表面的であり、新しい教育も一部の人々の間に広がっているだけで、多数の国民は無知蒙昧のままであることを秀吉の朝鮮侵略の際の耳塚(？)まで例に出して強調し、日米新条約批准に反対した。一二月二〇日の詳報の掲載以降、特にワールドの記事が欧州の各紙に転載されて反響を呼んで以降は、その日本批判は激しくなった。それらの見出しの幾つかを紹介するだけで、雰囲気は想像できる。

1894, 12, 13 America Is Against. The World's news of a massacre at Port Arthur astounds Washington.

Senators will not approve it until she can clear herself of the charge of barbarism.

12, 21 London Horror-struck. The World's story of the Port Arthur the big news.

1895, 1, 8 London Journals Follow The World. At last they print details of Port Arthur's massacre.

Japan Not Civilized. American consul-general at Yokohama makes an important private report to Washington.

1, 9 Now The "Thunderer". The London Times hears of the Port Arthur massacre at last.

1, 11 Japan Is Heartsick. Port Arthur stain upon her good name more than she can bear.

1, 20 Japan Showed No Mercy. Frederic Villier's crayon and pen corroborate Creelman's story.

The Japanese Went Completely Mad at Port Arthur. What indignant British naval officers say.

これらの非難の一方で、東京発あるいは在米日本公館発の日本弁護の記事も掲載された。一二月一七日の一面トップには、一二日のクリールマンの電報と並んで、陸奥宗光外相の弁明が大きく扱われ、続いて橋口在ニューヨーク領事の談話も掲載された。⁽⁹⁾かかる紙面の構成は矛盾を含んでいるようだが、ワールド新聞が常にセンセーショナルな記事を掲げ、それに関連記事や関係者の談話を配して立体的な紙面を作るのを特徴としていたことを思い起こせば、何の不思議も無い。ワールドにとっては、クリールマンの記事に欧州各紙が追隨し、さらにこれを契機に陸奥外相やグレンシャム國務長官のような大物が直接談話を寄せたことは、魅力的な紙面を作るうえで効果があった。日米新条約批准反対キャンペーンにしても、固執するものではなく、これが上院で批准されてしま

えは、取り上げなくなる。なにしろ事件が伝えられる直前には、新条約に好意的な報道をしていたのであるから。⁽¹⁴⁾これが、イエロー・ジャーナリズムの戦争報道のやり方であった。日清戦争に際して対外宣伝外交にあたった陸奥、伊東巳代治などは、旅順虐殺事件報道の「悪影響」を減殺する上での自分の功績をその著書や書簡の中で誇り、後の伝記作家もこれを肯定することがままあったが、以上の事情を勘案すれば、それが見当違いの過大評価ではないかと疑いたくなる。知ってか、知らずか、あらゆるニュース・ソースを吸収し、それで紙面を飾り、結果的に新聞の部数をのばしたワールドの編集者と経営者が、一枚上手であったようである。

なお、クリールマンの記事の日本の政府に与えた影響は前稿で述べたが、民間でのクリールマンの影響についても一、二の事例を紹介しておこう。⁽¹⁵⁾クリールマンの行動は以前から日本の新聞紙上でも紹介されていたから、その記事についての反応も早い。一二月四日の東京日日新聞には旅順事件に関する岡部特派員とクリールマンの問答が見える。また雑誌『日本人』には、長澤説「クリールマン彼れ何者ぞ」というワールド新聞一二月二〇日掲載の記事に対する反駁文が掲載されている。長澤の文章は、クリールマンの経歴と従来の報道を称賛を込めて紹介し、つづいて記事の大意を記して、それが誇大であり、かつ少々の虐殺は戦争の常である、と反発している。民間のジャーナリストにとっても、ワールドとクリールマンは気になる存在であった。

- (1) Emil Charles Pirok, "American Public Opinion of Japan's Rise to Power from 1889-1905," (Unpublished masters thesis, University of Illinois, 1960), pp. 32-33. なお史料③の第六章にも詳しい叙述あり。
- (2) *World*, Oct. 24, 1894. この記事は史料④第二章 "The Storming of Ping Yang," となった。
- (3) *World*, Nov. 14, 1894. 史料④の五三一—五四頁参照。橋立艦のキャビンで伊東と本堂に乾杯したならば、そこには海軍法律顧問高橋作衛(国際法学者)が同席した可能性が強い。高橋はどのような印象を持ったか、興味のあるところ

らである。

(4) 例えば、法概念として「文明」が、国際法において如何に問題にされてきたか追跡した作業としては、筒井若水「現代国際法における文明の地位」『国際法外交雑誌』第六六巻第五号、一九六八年を参照。また、拙稿「近代『食人』考—日清戦争史再検討の「前提」(上)は専修大学人文科学研究月報一—二二号、下は未刊)では、政治的「手段」としての国際法受容という問題に言及している。

(5) Horace Newton Allen (1858, 4, 23-1932, 12, 11)、朝鮮名は安蓮。合衆国プレスビテリアン教会医師として上海に渡航。一八八四年朝鮮の合衆国公使館医師となる。甲申政変に際して、閔泳翊等の負傷者を治療して名声を得、朝鮮政府および日英公使館の囑託医師となる。この為、政府・外交団の要人と知り合い、翌年朝鮮政府の設立した広惠院医師となり、西洋医師の教習を行う。一八九一年、教会を退き、合衆国公使館書記官、総領事、代理公使を歴任し、一九〇五年まで在職した。かれには次のような著書がある。

Korean Tales, 1889.

Chronological Index of Foreign Relations of Korea from Beginning of Christian Era to 20th Century, 1900. (桜

井義之訳『朝鮮近代外交年表』淡路社、一九六一年)

Korea: Fact and Fancy, 1904.

Things Korean, 1908.

The Awakening of Korea, 1910.

この部分は上記年表の「マレン小伝」による。マレンの伝記(未刊行PHD論文)には次のものがある。

Fred Harvey Harrington, *God, Mammom and the Japanese; Dr. Horace N. Allen and Korean-American Relations, 1884-1905*. Madison University, 1944.

(6) *World*, Dec. 3, 1894. 史料③第三章“Interview with the King of Corea.”朝鮮の歴史に関する部分は前記のマレンの著書の記述とよく似ている。タリールマンとマレンの関係を窺わせる所である。

(7) 有賀の著書は、政府や陸軍の機密資料(現在では見ることができなくなってしまう)を使い、在仏日本公使館の全面的援助の下に、戦争終了後の早い時期に、まずフランス語で刊行されたもので、その主要な目的は日清戦争が「文明」

- 的に遂行された事を欧米各国に宣伝することであった。拙稿「旅順虐殺事件の一考察」二八八—二八九頁参照。
- (8) *World*, Dec. 5, 15, 16, 1894. 史料④第四章 “A Ride with Japanese Invaders in Manchuria.”
- (9) *World*, Nov. 17, 24, 1894.
- (10) *World*, Dec. 20, 1894. この記事は史料④第五章 “Battle and massacre of Port Arthur” に収録されたが、何故か内容云々の部分は省略されている。
- (11) 前掲「近代『食人』考」参照。
- (12) *World*, Dec. 22, 23, 1894. Jan. 7, 1895.
- (13) その見出しは “Japan Confesses. Her government makes an official statement to the World.” であった。この記事が掲載された事情は前掲拙稿で紹介した。
- (14) ワールド新聞は二月九日の “New Treaty with Japan.” という記事では新条約を好意的に紹介したが、二月三日の “America Is Against.” という記事では一転して条約締結反対にまわった。
- (15) 岡部四山「旅順口略取後談」『東京日日』一八九四年二月四日。「米国ワールド記者クリールマンは余に語りて曰く今回日兵の清兵に対するは従前の如く寛大ならざるを覚ゆと予は之に答へて曰く是れ当然のみ君は土城子に於ける清兵の挙動を目撃せざりしか(中略)君亦清仏戦争の戦史を読みたる乎とク氏黙して止む」。岡部はこの問答が後に大事件になることは想像もできなかったであろう。長澤の論文は『日本人』(第二次)一八号、一八九九年二月三日所収。また史料④のクリールマンの著書は刊行の翌年、日本で英語の注釈付き教科書として売り出されている。ただし、旅順虐殺事件の部分は刊行されていないようである(国会図書館所蔵)。
- News Gathering in the Clouds.* (空中船) 藤井金六編注、英学新報社、一九〇二年。
- A War Correspondent.* (従軍記者) 藤井編注、英学新報社、一九〇二年。

四 むすびにかえて——共感から警戒へ、日本観の変化——

本稿では紙幅の関係上、ワールド新聞の日清戦争報道の論調の分析は、開戦報道から旅順虐殺事件批判キャンペーンに至る時期、即ち戦争の前半部分に限定せざるを得ず、講和交渉、三国干渉、台湾の戦争、閩妃事件等の重要事件が発生する戦争の後半部分のその分析は後日の課題として残さざるを得ない。

しかし、この前半部分の不十分な分析によってさえも、同紙の日清戦争報道は日本関連報道としては空前の規模であること、およびワールド新聞の論調には様々な要素を含みながらも、全体としては開戦当初と半年後の一八九五年の初頭ではかなりの変化が生じたことが指摘できるように思う。同紙の日清戦争報道、即ち珍しい驚異に満ちた東洋の戦争をニューヨークの読者に伝える際の基準は、同紙の平生の報道の基準と同様に、「正義」と「文明」というかなり単純で、かつ当時の人々の誰もが反対できないものであった。⁽¹⁾ 前掲のハーデン論文のテーゼにそって考えれば、「朝鮮の解放」という日本の公式の戦争目的は「正義」であり、西欧文明の模倣・戦争の「文明化」という明治維新以来の日本の努力は、日本が東洋における西欧文明の代表であるとのイメージさえ作り出した。さらに、日本は中国に対して“Underdog”であるだけでなく、合衆国にとっても安心して対応できる弱小国であった。従って、合衆国において開戦当初は親日本報道が盛んで、ワールドとその特派通信員のクリールマンが合衆国の一般的風潮に同調した記事を掲載したことは自然であった。

ところが、戦争の現実に触れたクリールマンは、日清戦争Ⅱ「正義」と「文明」の戦争という日本側の主張（そして合衆国における戦争認識）が虚偽であるとの認識を持つようになり、かかる観点に立って朝鮮国王との会見記、旅順虐殺事件の記事を執筆した。これを受けてワールド新聞の編集者は日本批判のキャンペーンを張り、これが結果的には同紙の部数増大の一助となり、さらに三年後の米西戦争時のイエロー・ジャーナリズム的戦争報道の基本パターンを用意したのであった。ワールド新聞は日清戦争の勝利者の一人である、という言い方も間違

いとはいえない。

それでは日本のイメージは戦争の勝利によってどのように変化したのであろうか。まず第一に、日本は弱者から強者に転化した。第二に、この新興国の本当の狙いは隣国朝鮮と老大国中国の領土の侵略であることが明白となった。第三に、この国は明治維新以来西欧諸国に倣った「文明化」を図ってきたにもかかわらず、それは外見だけでその実は「野蛮」＝非西欧である。この三つを総合した日本のイメージは、西欧文明の枠では理解できない極東における新しい好戦的パワー＝怪獣の誕生、といったところである。戦争の後半で発生した諸事件、講和使節李鴻章狙撃事件、閔妃事件などはこのイメージをさらに強める方にはたらない。日本政府は戦争に勝利し、外務省の対外広報外交も一定の成果をあげた。それにもかかわらず、戦争の結果生まれた新しい日本イメージは、皮肉にも黄禍論にも通じかねない危険なものであった。⁽²⁾ 松村氏は前掲の二冊の著書で日露戦争時の戦時広報外交を克明に論証されたが、その必要性が生じた契機の一つは日清戦争の勝利であった。

以上の問題とは別の問題であるが、事実を明らかにするための史料としてのワールド新聞の記事の価値はどのように考えるべきか、について言及する必要がある。クリールマンの記事が真実を伝えていないとの批判は多い。例えば、ニューヨーク駐在の橋口領事は外務大臣宛の報告において、ワールド新聞は「一定ノ節操ナキ故」中国側に買収されたのではないかと疑い、クリールマンの記事を「舞文曲筆」と評するむきもあり、⁽³⁾ 現代の歴史研究者でもイエロー・ジャーナリズムだから信用できないと考える人もあろう。しかし、イエロー・ジャーナリズムだからとの理由で、その記事の価値を完全に否定することは、それを全部信用するのと同じ誤りを犯すことになる。要は、これらのやや誇張された報道の、どこが真実でどこが偽りかを、慎重に吟味して使うべきである、との平凡な結論に帰着するのであろう。

(1) ワールドの報道の特徴は第二章の註(1)で引用した George Juergens の著書をよび史料⑥DLBのビュリッツァーの項目を参照。

(2) 日清戦争後に対日警戒論が合衆国のジャーナリズムに現れたことは史料①のハーデン論文を参照。

(3) 外務省記録『日清戦争中旅順口戦闘関係雑件』(明治大正五、二、二、七)所収、一八九四年二月一五日付陸奥宗光外相宛橋口領事書簡「機密信第六号」第二軍に従軍したオブライエン陸軍中尉が、クリールマンの記事は誇張されているが真実だ、と語っている。New York Times, July 8, 1895.

(4) 前掲『日露戦争と金子堅太郎』参照。考えてみれば、金子にしても橋口にしても、クリールマンの記事の影響力を重視するからこそ、それに反撥したのであり、これらのクリールマンに否定的な発言はかえってその影響力を逆説的に証明するものである。橋口はこれより以前の報告では、ワールド新聞の影響力を強調していたにもかかわらず、急にそれを否定しはじめる。一種の保身であろう。